

11

信濃国小諸白倉松軒信煥・加川隆礼兄弟の 産科術（回生術）記録

鈴木 則子

奈良女子大学生生活環境学部

本報告は信濃国小諸の産科医、白倉松軒信煥と加川隆礼という兄弟それぞれの産科手術（回生術）の記録から、幕末の地域産科医療の実態を考察するものである。

二人は小諸の賀川流産科医白倉松軒信良を父に持つ。父信良は二本松藩医椎野安節の弟子、安節は賀川玄悦（元禄13年-安永6年（1700-1777））の弟子である。

兄である白倉松軒信煥の記録は『回生談』と名付けられ、京都大学富士川文庫に写本が残る。天保3年（1832）4月、藩医であった信煥が藩主について一年間江戸へ行くにあたり、病身であるため生きて帰れないことを危惧して、自分の回生術の経験を実弟加川隆礼に口述筆記させ、我が子が成人後に伝えることを依頼したもので、刊行された書ではない。

『回生談』は信煥の初回・二回目・三回目の回生術の施術経験を、心の動きまで含めて詳細につづり、回生術の技術だけでなく、取り組む者の心構えも説く。初めて施術したときの「初陣」のような緊張と高揚感、試行錯誤の施術プロセス、胎児の頭部が出て苦しみから解放された産婦が信煥に発した「旦那様、ありがたし」という謝辞、死胎の腐臭、一昼夜かけて胎児の全身を摘出し終えたときの親戚一同の歓声、夫のうれし涙など。信煥の口述には、医療技術が産婦とその家族・親戚といった多くの人々の幸せに直結することへの医者としての誇りと社会的使命への自覚を読み取ることができよう。

いっぽう、弟の隆礼による同名の書『回生談』は嘉永5年（1852）の刊本で、杏雨書屋の所蔵である。隆礼は江戸で儒学を学ぶも、30代で父や兄と同じ産科医に転向して小諸で開業した。本書の執筆時はすでに50歳になり、過去十数年間、年に100件近い出産を扱ってきて、産科にかけては誰にも引けを取らないと自負している。本書は序文を幕府医学館教授の多紀元堅と江戸の儒者亀田綾瀬、跋文を高遠藩藩医中村元常が記し、本文には回生術を中心とする難産の治験を9件載せる。

治験にはそれぞれの産婦の居住地が記載されているため、小諸城下で開業していた隆礼の診療地域が城下町だけでなく、農村部の村医者とも連携しながら佐久や追分、前橋のあたりまで広がっていたことが確認できる。

治験本文には、産婦の家族や親戚が回生術施術への合意を形成していく過程、産婆・他医と協力しながらの長時間に及ぶ手術のプロセス、双子や三つ子の出産介助経験、隆礼が産婦の動揺や苦しみを軽減しようと言葉を盡す姿などが記される。これらの史料からは生死にかかわる難産の場において、産婦・医者・産婆・産婦の近親者や近隣の人々が相互にどのような関係性を築いていたかがうかがえる。

字数が限られているので一例だけ挙げておく。小原百姓勝三妻の場合。隆礼が呼ばれて診ると横産（胎児が横位）で、回生術しか対応方法がない。回生術を受けるかどうかの最終決定は、「親戚及近隣者」を集めた協議によって行われた。回生術にかかる前、隆礼は産婦に薬を飲ませながら「しばらく我慢するのですよ。私があなたの命を救うから」と励ましている。腹部を強く押して胎児の位置を下げたのち、産道に手や鉤を入れ、胎児を分解したり折り曲げたり、位置をずらしたりしながら引っぱり。6月の炎暑の頃で吹き出る汗を傍らの人に拭き取らせながらの施術である。ようやく胎児を出し切ったとき、夫は「狂喜」して感謝し、居合わせた人々も隆礼の技術を「奇」（抜き出す）と称賛した。